

昨年末に24年ぶりに吉本新喜劇の同期芸人と再会しました。私以外の6人全員が今も現役で芸人を続けています。

ライバルというよりは同志という感覚で、一度のけんかやもめ事もなく、強い仲間意識がありました。その理由は、6カ月にもわたる少し変わったオーディションの方法にあります。今回は、オーディションとその合格への道について2回シリーズでお伝えします。吉本新喜劇のオーディションです

④ 吉本新喜劇
オーディション①



大阪成蹊大准教授 福岡亮治

が、「発想の転換」という視点でこれから受験や就職で面接がある人の参考になればという思いを込めて書いていきます。

【1次試験・書類面接】

1996年、インターネットが普及してないので、雑誌広告でオーディション情報を発見し、市販の履歴書で応募。趣味「将棋」、特技「水泳」、備考欄「新喜劇大好き」目立ったことは書けませんでした。書類選考に合格しましたが、応募総数は分かりませんが、

2次選考の集団面接に進んだのは200人でした。

【2次試験・集団面接】

面接官5人、受験者5人の集団面接で内容は大きく分けて三つ。

①1分で自己紹介

「大学生である」「新喜劇大好き」を伝えただけで持ち時間いっぱいになり終了。

②質疑応答

大学在学中だったので、「合格したら大学はどうする？」という質問がきました。当時、休学して

某テレビ局で裏方(カメラアシスタント)をしていた私は「今も大学に行っていないから行きません」と即答。

③最後のアピール

「アピールがあれば右から順番に」と言われた参加者がボケはじめ、単なるアピールタイムのはずなのに一発ギャグの時間になりました。私は最後の5番目。面接官はプロのお笑い芸人に関わってきた人。それぞれが一発ギャグに挑戦、しかし、即興の素人ギャグが

ウケる訳はなく、地獄の時間に…。「どうしよう」何のギャグも思い浮かばず、4人目のアピールがスタート、高学歴をアピールして目立っていた方も「一発ギャグやります!」と声を張り上げて挑戦。

しかし、「何?」とおかしな空気のまま私の番に…。

ここで皆さんに質問です。皆さんならばどうしますか?

私はギャグはせず「子どもの時から夢でした…」と新喜劇愛を語り終了。面接官からの「なぜ一発ギャグをしないのか?」との質



問に、「こんな怖い空気の中でできません」と返答。すると面接官から「そんなに私たちが怖い?」と聞かれ、「めっちゃ怖いですよ」と返すと面接官は笑顔に! 結果的に面接官を笑わせたのは、ギャグで笑いをねらわなかった私でした。25年以上前なので電話で結果発表があり合格! 勝因は周りに流されなかったこと。「200人↓40人」(次回に続く)

面接の極意は「周りに流されない」